

# 林芙美子 略年譜

北九州市立文学館館長 今川英子氏原作を編集

西暦	和暦	歳	行 跡
1903	M36	0	12月31日(戸籍上)、福岡県門司市大字小森江で、林キクの婚外子として生まれる。 本名、フミコ。 誕生日については、キクは6月と語り、フミコは5月と記している。 父の認知はなく、キクの弟林久吉の姪として入籍された。 実父宮田麻太郎は愛媛県出身の行商人。 桜島の古里温泉に滞在中、久吉の営む温泉宿を手伝っていたキクと結ばれた。 共に行商をしながら転々とし、芙美子出生の頃は、門司にいた。
1904	37	1	宮田は商才にたけ、門司から下関に転居、「軍人屋」という質物を扱う店を構えた。 3年後には、石炭景気でにぎわう若松市本町に店を移し、長崎、熊本にも支店を出す繁盛ぶりで、 一家は裕福であった。
1910	43	7	1月、宮田が芸者を家に入れたため、キクは芙美子を連れ、店員の沢井喜三郎と家を出て、長崎へ移った。 沢井は、岡山県児島郡の出身。 4月、長崎市勝山尋常小学校へ入学。 後、佐世保市八幡女児尋常小学校に転校。
1911	44	8	沢井は、下関で一戸を構えて古着商を営み、生活は安定していた。 1月、下関市名池尋常小学校へ転校。
1914	T3	11	沢井の店が倒産。 両親が行商に出るため、芙美子は一時祖母の家に預けられる。 10月、鹿児島市山下小学校5年に編入。 芙美子の行跡は、この後大正5年まで不明。 ちなみに、山下小学校は、向田邦子の母校でもある。
1916	5	13	5月、一家は広島県尾道市に転居。 6月、第二尾道尋常小学校5年に編入。
1917	6	14	教師の小林正雄が、芙美子の文学や絵の才能を見出し、女学校進学を勧める。 因島から忠海中学校に通学していた岡野軍一と親しくなる。 岡野は、『放浪記』の「島の男」のモデルである。
1918	7	15	4月、尾道市立高等女学校に入学。 学費を稼ぐため、夜は帆布工場に勤め、夏休みには手伝いとして働いた。 読書に熱中し、国語教師森要人により文才を認められ、校友会誌に作文が載る。
1919	8	16	夏、直方に住む実父に会いに行く。 国語教師今井篤三郎が赴任、芙美子の文才を育み、生涯にわたって師弟関係を結ぶ。 詩作を始める。
1921	10	18	秋沼陽子のペンネームで、「山陽日日新聞」「備後時事新報」に短歌や詩が載る。
1922	11	19	3月、女学校卒業。 明治大学に通う岡野を頼って上京、小石川雑司ヶ谷に住む。 風呂場の下足番や帯封書き、株屋の事務員などの職に就く。 8月、両親が上京、道玄坂や神楽坂に露店を出す。

1923	12	20	<p>3月、大学を出た岡野は、家族の反対で芙美子との婚約を解消し、郷里因島で就職する。芙美子は、不景気の中、東京で職を転々とする。</p> <p>9月、関東大震災で罹災。</p> <p>灘の酒荷船に便乗して大阪まで行き、尾道に帰る。</p> <p>その後、単身で再び上京、女工や手伝いをして働く。</p> <p>この頃から「歌日記」と題する日記を書き始め、これがのちの『放浪記』の原型となる。</p>
1924	13	21	<p>3月、詩人で新劇俳優の田辺若男と同棲。</p> <p>田辺の紹介で、アナキスト詩人萩原恭次郎、壺井繁治、岡本潤、高橋新吉、平林たい子らを知り、親交を深める。</p> <p>6月、田辺と別れる。</p> <p>7月、友谷静栄とリーフレット型の詩誌「二人」を創刊(3号まで)。</p> <p>8月、「文藝戦線」に詩を発表。</p> <p>この頃、宇野浩二に小説作法の教えを乞い、徳田秋声には金銭的援助を受けた。</p> <p>12月、詩人野村吉哉と同棲。</p>
1925	14	22	<p>4月、野村と世田谷町太子堂の二軒長屋に住む。</p> <p>隣には、壺井繁治・栄夫婦が住み、付近には平林たい子・飯田徳太郎(同棲)や黒島伝治らもいた。</p> <p>たい子とともに、詩、童話を売りに歩く。</p> <p>冬、夜逃げをして世田谷町瀬田に移る。</p>
1926	S元	23	<p>1月末、野村との同棲を解消し、新宿のカフェの住込み女給となる。</p> <p>12月、本郷区追分町のたい子の下宿に同居、後下谷茅町に住む。</p> <p>蓬萊町の大和館に下宿していた洋画を勉強中の長野県出身の手塚緑敏を知り、同棲。</p>
1927	2	24	<p>1月、杉並区高円寺に転居。</p> <p>5月、杉並区妙法寺境内に移る。</p> <p>「清貧の書」は、この頃の生活を小説化している。</p>
1928	3	25	<p>8月、「女人藝術」2号に詩「黍畑」を発表。</p> <p>10月、三上於菟吉の推薦で同誌に発表した「秋が来たんだー放浪記」が好評を得て、昭和5年10月まで断続連載となる。</p>
1929	4	26	<p>6月、第一詩集『蒼馬を見たり』(南宋書院)刊行。</p> <p>この頃より雑誌社から原稿依頼が来るようになる。</p> <p>10月、「九州炭鉱街放浪記」(「改造」)発表。</p>
1930	5	27	<p>1月、台湾総督府の招待で台湾を旅行、紀行文を「改造」などに発表。</p> <p>5月、豊多摩郡落合町上落合(現新宿区上落合)に転居。</p> <p>7月、『放浪記』(新鋭文学叢書・改造社)刊行、ベストセラーとなる。</p> <p>8月から9月、満州、中国を旅行、内山完造の紹介で魯迅と会う。</p> <p>11月、『続放浪記』(第二次新鋭文学叢書・改造社)刊行</p>
1931	6	28	<p>1月から、「春浅譜」(「東京朝日新聞」夕刊～2月)連載。</p> <p>4月、「風琴と魚の町」(「改造」)発表。</p> <p>この頃から、流行作家として身辺が多忙になる。</p> <p>11月、「清貧の書」(「改造」)発表。</p> <p>同月、シベリア経由でヨーロッパ旅行に出発。</p> <p>パリに滞在し、芝居、オペラ、音楽会、美術館に通う一方、エッセイやコラムの原稿を日本に送り、生活費を得た。</p> <p>国際大学都市日本館(薩摩屋敷)に滞在していた考古学者森本六爾らの留学生と親しくした。</p>

1932	7	29	<p>1月、ロンドンに渡り1ヶ月滞在。 再びパリに戻り、ホテル・フロドールやダゲール22番街に滞在。 フランス語を学ぶために語学学校にも通う。 4月、パリに来ていたベルリン大学の留学生白井晟一を知り、恋をする。 円の大暴落の為、経済的には苦しく、5月、改造社社長山本実彦から旅費を借りて帰途につく。 途中、上海で魯迅に会い、6月帰国。 8月、下落合に転居。</p>
1933	8	30	<p>3月、両親が上京。 5月、『清貧の書』(改造社)、『三等旅行記』(改造社)刊行。 8月、詩集『面影』(文学クオタイ社)刊行。 9月4日から9日間、共産党への資金寄付をめぐって中野警察署に留置される。 11月、義父沢井喜三郎死去。母を引き取る。</p>
1934	9	31	<p>3月、『厨女雑記』(岡倉書房)刊行。 4月、『散文家の日記』(改造社)刊行。 8月、『旅だより』(改造社)刊行。 この頃から、油絵を描き始める。</p>
1935	10	32	<p>2月、『泣虫小僧』(改造社)、『人形聖書』(麗日社)刊行。 5月、&lt;放浪記&gt;が木村莊十二監督により映画化される。 8月、『文学的自叙伝』(「新潮」)発表。 9月、『牡蠣』(改造社)刊行。</p>
1936	11	33	<p>3月、『野麦の唄』(中央公論社)刊行。 4月、『文学的断章』(河出書房)刊行。 6月、コクトー来日、文芸家協会を代表して花束贈呈。 9月、毎日新聞社主催&lt;国立公園早廻り競争&gt;に参加。山陰、瀬戸内海を廻る途中、実父と会う。 10月、満州、中国に遊び、写生旅行中の緑敏と合流。 11月、『愛情』(改造社)刊行。 12月、『稲妻』(有光社)刊行。</p>
1937	12	34	<p>1月、『女の日記』(第一書房)刊行。 4月、『田舎がへり』(改造社)。 6月から『林芙美子選集』全七巻(改造社 12月完結)刊行。 10月、『花の位置』(竹村書房)、『紅葉の懺悔』(版画社)刊行。 11月、緑敏が召集される。 12月、南京陥落に際し、毎日新聞特派員として上海、南京へ赴き「女流の一番乗り」として南京光華門に立つ。</p>
1938	13	35	<p>1月、帰国。 3月、『氷河』(竹村書房)刊行。 7月、『私の昆虫記』(改造社)刊行。 9月、『月夜』(竹村書房)刊行。 同月、内閣情報部による「ペン部隊」の一員として上海に発つ。 10月、漢口陥落に従軍作家として一番乗りを果たす。 帰国後、全国を報告講演を行う。 12月、『戦線』(朝日新聞社)刊行。</p>
1939	14	36	<p>1月、『北岸部隊』(中央公論社)刊行。 7月、『波濤』(朝日新聞社)刊行。 12月、下落合四丁目(現新宿区中井二丁目20-1 林芙美子記念館)の家屋新築工事に着手。 11月、『放浪記-決定版-』(新潮社)刊行。</p>

1940	15	37	<p>1月、北満州を旅行。        々 『一人の生涯』(創元社)刊行。        3月、『青春』(実業之日本社)刊行。        4月、『悪闘』(中央公論社)刊行。        5月、文藝銃後運動講演で東京・近畿へ。        8月、『女優記』(新潮社)刊行。        11月、小林秀雄らと朝鮮へ講演旅行。        12月、『七つの燈』(むらさき出版部)、『魚介』(改造社)刊行。</p>
1941	16	38	<p>1月、『十年間』(新潮社)刊行。        5～6月、「偏舟紀行」取材のため四国旅行。        7月、『啓吉の学校』(紀元社)刊行。        8月、新居に移る。        9月、大佛次郎、佐多稲子らと満州に戦地慰問。        10月、『日記第一巻』(東峰書房)刊行。        12月、『川歌』(新潮社)刊行。</p>
1942	17	39	<p>8月、文芸報国運動講演会の講師として北海道に赴く。        10月、陸軍報道部の徴用に応じ、南方視察に出発。        シンガポール、ジャワ、スマトラに滞在。</p>
1943	18	40	<p>5月、帰国し、各地で報告講演。        12月、生後間もない男児を養子とし、泰(たい)と名づける。</p>
1944	19	41	<p>3月、緑敏と泰を林家に入籍。        4月、長野県上林温泉に疎開。        5月、長野県角間温泉に疎開。</p>
1945	20	42	<p>10月、疎開先から帰郷。</p>
1946	21	43	<p>ジャーナリズムの復活に伴い、旺盛な執筆活動を再開する。        1月、『吹雪』(「人間」)発表。        4月、『女の日記』(八雲書店)刊行。        8月、『旅情の海』(新潮社)刊行。        12月、『うき草』(丹頂書房)刊行。</p>
1947	22	44	<p>1月、『河沙魚』(「人間」)発表。        2月、『旅館のバイブル』(大阪新聞東京支社)刊行。        3月、『人間世界』(永晃社)刊行。        5月、『一粒の葡萄』(南北書園)刊行。        同月から「放浪記第三部」(「日本小説」～昭23・10月号)連載。        6月、『淪落』(関東出版社)刊行。        8月、『林芙美子創作ノート』(酣燈社)刊行。        9月、『舞姫の記』(尾崎書房)、他続々刊行。</p>
1948	23	45	<p>この頃から熱海の「桃山荘」に滞在して執筆することが多くなる。        2月、『うず潮』(新潮社)、『ヴロナスの牧歌』(照国書店)刊行。        3月、『宿命を問ふ女』(尾崎書房)刊行。        5月、『暗い花』(文藝春秋新社)刊行。        11月、『晩菊』(「別冊文藝春秋」)発表。        この作品は、翌年女流文学賞を受賞する。        12月から『林芙美子文庫』全10巻(新潮社～昭25.10)刊行。</p>

1949	24	46	<p>1月、『放浪記第三部』(留女書店)刊行。  2月、『骨』(中央公論)、『水仙』(『小説新潮』)発表。  3月、『妻と良人』(尾崎書房)、『女性神髓』(養徳社)、『晩菊』(新潮社)刊行。  5月、『第二の結婚』(主婦の友社)刊行。  11月から『浮雲』(『風雪』)～昭25.8/後、『文學界』昭25.9～昭26.4連載。</p>
1950	25	47	<p>1月、『夜猿』(『改造』)発表。  4月、泰を学習院初等科に入学させる。  同月から5月にかけて、『主婦の友』特派員として屋久島に赴く。屋久島へ向かう途中の4月21日、天草富岡来訪。岡野屋旅館泊。  5月、『天草灘』(『別冊文藝春秋第十六号』)発表。  11月、『茶色の眼』(朝日新聞社)刊行。  12月、『新淀君』(読売新聞社)刊行。  この頃から心臓弁膜症が悪化。</p>
1951	26	48	<p>1月から『漣波』(『中央公論』)、『女家族』(『婦人公論』)、『真珠母』(『主婦の友』)連載。  同月、『浮雲』(六興出版社)刊行。  6月27日、取材のため銀座、深川で食事した後帰宅。就床後まもなく苦悶し始め、翌28日午前1時頃永眠。  死因は、心臓麻痺。</p>